

茶の耳

抽出とは暴力だ、と言った女がいた。

古い茶葉缶に残ったその言葉は、今も蓋の内側にくっついてたまま取れないでいる。文字通り、というよりは、音として。ささやかに、ぬるく、低く、漏れ出すように。

私は朝、決まってお茶を淹れる。やかんの音に生活が重なり、お湯の沸く前に窓を開ける。あの湯気の昇る直前、少しだけ空気の流れが止まる。その一瞬の「無風」を、私は「茶の耳」と呼んでいた。日記にはそう書いてあった。数年前の私が。

ある日、私は台所に座ったまま、茶の耳に頭を寄せた。急須の注ぎ口にも、耳を当てる。茶葉はまだ眠っていて音がない。けれど、深く澱んだその沈黙こそが、何かを語っている気がして、私は目を閉じた。抽出前の水。抽出後の沈黙。それらの中間に、ある種の意味のようなものがある。

「黙ってるね、今日も」と私は声に出してみた。

返事は、もちろんない。ただ、湯呑みに張った水面がわずかに震えていた。もしかすると、誰かが窓を閉めたのかもしれない。あるいは、過去の自分がくしゃみをした音の残響？

私には、よく一緒にお茶を飲んでいる人がいる。名前はまだ聞いていないが、私のマンションの一つ上の階に住んでいた。その人は「一煎目より、二煎目がいい」とよく口にしていた。渋味が落ち着いて、人の輪郭に似てくるからだ。私はそれを否定もしなかったが、どこかで「三煎目」が好きだった。味がほとんどなくなって、ほとんど水になったあたり。そこに残るものこそ、真実だと信じていた。記憶もたぶん、そういうものだ。

ひとつき前、その人が死んだ。

マンションの構造上、あちらの湯沸かし器の音は、私の台所にも微かに届いていた。亡くなって数日経っても、それが聞こえなくなるまで、私は死を疑わなかった。誰かの死が、生活音の消失として認識されるというのは、何とも奇妙で、だが、それが最も誠実な哀悼かもしれないと思った。今朝、私はふと思い立ち、古い茶葉を淹れた。賞味期限はとうに切れていた。封を開けたとき、少し土の匂いがあった。抽出された液体は、色というよりも影に近く、味というよりも既視感だった。私の舌は、まったくその過去を思い出せなかった。急須を覗き込むと、中の茶葉がわずかに開いていた。まるで耳をひらくように。私はもう一度、その注ぎ口に耳を寄せた。微かな音がした。それが水の記憶か、葉の断末魔か、あるいは私の耳鳴りか、判然としなかったが、それで十分だった。

午後、コンビニで買ったペットボトルの緑茶を口にする。まるで誰かの他人行儀な笑顔のように、均質で、記憶

に残らない味だった。けれど、たぶんそれでいいのだ。記憶されないことも、また存在の一形態だと、最近は思うようになった。

夜、食器を洗いながら、ふとあの女の言葉を思い出す。

――抽出とは暴力だ。

確かに。私たちは常に、何かを取り出し、何かを失っている。会話にしてもそうだ。言葉を発するたびに、その後にはいた沈黙が壊れていく。だから私は、今日も黙ってお茶を淹れる。茶葉の語らぬ声を聞くために。

耳をすませば、きっとまだ、あの誰かが二煎目を待っている気がする。